【校内研究主題】

望ましい成長を促す小中一貫教育の展開
～発達段階を考慮した「書く活動」と「立石安心プロジェクト」の取組を通して～

１　主題設定の理由

（１）学習指導要領と社会的要請から

新学習指導要領（国語編）には、中教審答申で「中学校では、（中略）根拠を明確にして書く」ことが課題であると明記されている。それに伴い、全国学力・学習状況調査において「書く力」を測る問題が数多く出題されるようになった。また、文化審議会答申等において「論理的思考力の育成は『書くこと』が中心となる」と述べられている。つまり、「書くこと」は、思考力・判断力・表現力の育成において特に重視すべき言語活動であるといえる。新学習指導要領の総則第１には、「生徒の心身の発達の段階や特性及び学校や地域の実態を十分考慮する」ことについて言及している。

また、ベネッセ教育総合研究所の報告では、子どもの早期成熟化に対応した学校体系について、小５、小６をスムーズに中１へつなぐためのカリキュラムの工夫等の重要性が指摘されている。小中一貫教育の必要性が求められているがその背景にあるのは、「子どもの発達の早まり」「勉強や人間関係のつまづき」「中学校での学習や生活への不適応」など、いわゆる「９（１０）歳の壁」「中１ギャップ」の解消である。こうした状況に対応するため、義務教育９年間を小学校６年間、中学校３年間の「６・３制」を維持しつつ、前期４年・中期３年・後期２年の区分で指導内容の重点化や指導体制の工夫を行うことは大変意義深い。

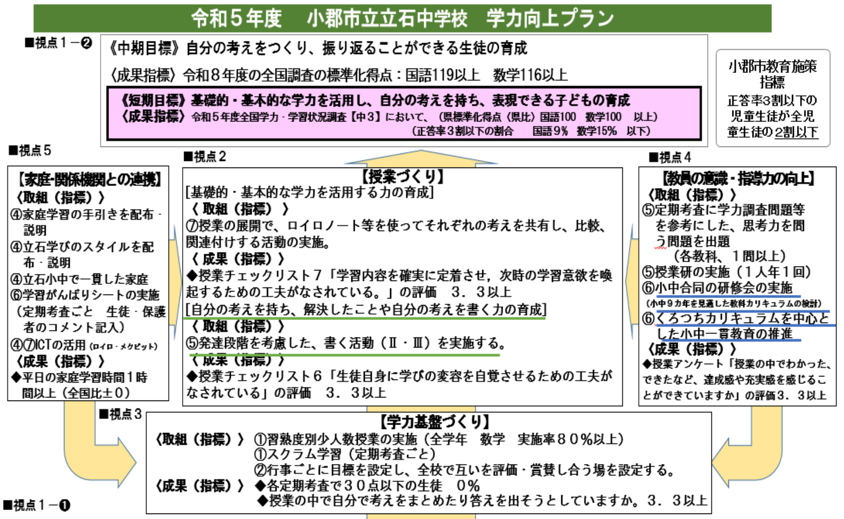
（２）地域の特性と学校教育目標から

本校区は、自然環境に恵まれ、穴観音古墳など多数の遺跡が点在している。また、松崎宿は江戸時代の宿場町として栄え、今も町並みなどに歴史を感じさせる油屋など貴重な文化遺産も存在している。さらには、詩人・文芸評論家として活躍した野田宇太郎のような偉人も輩出している。このような地域の財産は、子どもたちに豊かな体験や学びの場を提供している。小中学校は、隣接した１小学校・１中学校ということもあり、小中で連携した教育活動を推進しやすい環境にある。また、地域の学校教育に対する意識は高く、地域で子どもを育てようという風土がある。このような地域の特性から、本年度より小中の学校教育目標を小中で一本化「郷土を愛し、自分で化考え、自ら行動する子どもの育成」とし、《学力向上プラン》の視点４にも示している小中一貫教育の推進を進めている。

（３）生徒の実態から

令和４年度の福岡県学力調査において、現中学３年生の記述式問題の標準化得点率は、全国と比べ国語 80.2 ポイント、数学 72.8 ポイントであった。現２年生においても、数学が 97.8 ポイントと全国平均を下回った。令和５年度全国・学力学習状況調査においても、記述式問題「書くこと」に課題が見られ、小学校においても同様の傾向がみられた。

このような課題を受け、《学力向上プラン》の視点２に[自分の考えを持ち、解決したことや自分の考えを書く力の育成]「発達段階を考慮した、書く活動（Ⅱ・Ⅲ）」を設定した。



県学力調査,全国学力調査及び「授業評価アンケート」、「授業チェックリスト」等から見た「課題」						授業づくりや学力向上の取組に係る「要因」
正答率３割以下の割合、標準化得点		国語		数学		①学力の個人差が大きく、下位層の子どもへの指導が不十分
		正答率３割以下(%)	標準化得点	正答率３割以下(%)	標準化得点	②主体的な目標設定、共同作業、評価・賞賛の場の不足
	R４県調査	12	90.7	30	79.6	③学習内容を定着させる手立ての不足
	R５全国調査	7	88.8	38.5	82.4	④家庭学習の時間が不足してる。
課題	・国語「書くこと」、数学「図形」に課題 ・正答率3割以下の割合が、国語は7%だが、数学は38.5%となっており、CD層の割合が国語は59%、数学は58%と全国と比較して割合が多くなってしまっている。					⑤根拠を明確に自分の意見を表現する活動の不足
質問紙調査等	・生徒質問紙「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」(全国比－17.6) ・生徒質問紙「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」(全国比－16.4)					⑥小中連携の更なる向上 ⑦生徒がICT機器の有用性を実感していない。

２　研究主題・副題について

（１）主題の意味

①　「望ましい成長を促す」とは

発達段階を考慮した適切な教育課程を展開し、子どもの健全育成を図ることである。

（※副主題）発達段階を考慮するとは、子どもの発達段階を大脳生理学の視点から分析し、学習するために最適な臨界期と関連づけて考えることである。早稲田大学教育学部の安彦忠彦教授や広島大学の井上弥名誉教授は、子どもの脳の発達段階と知識の獲得について次のように述べている。

ア　脳の発達の臨界期

「脳は領域ごとに順番に発達するのではなく全体として発達するが、ある時期に特定の領域が優位に発達する傾向がある。具体的には、５歳から７歳までは言語や数を扱う領野が優位に発達する。この時期の子どもは「早く大人と同じようになりたい」という願望が強く、貪欲なまでに知識を得ようとする。しかし、物事の理屈までは理解が至らない。「どうして？」という質問はするが、筋の通らない答えを返しても意外と簡単に納得してしまう。」よって、小学校低学年までは、理屈抜きで、計算問題などの単純な技能を習得・習熟させるのにふさわしい時期といえる。一方、９歳から１１歳までは論理的・抽象的な思考が芽生えてくる。この頃から、理屈をこねて議論することを好むようになり、表層的な言葉や数だけでなく、抽象的な概念も理解できるようになる。

イ　「６・３制」と中１ギャップ

日本の子どもの身体的成長や生理的成熟が早まっており、現行の学校制度「６・３制」と子どもの発達状況との不整合が、小学校生活とは異なる新しい環境や生活スタイルなどになじめず、授業についていけなくなったり、不登校につながったりする原因となる、いわゆる中１ギャップにつながっているのではないかと言われている。

ウ　発達段階からみた「４・３・２」制

脳科学の知見や子どもの発達状況の変化を総合し、「６・３」を「４・３・２」に分けて小→中のつながりの時期（連携活用期）を重視することが大切であると考える。また、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図る時期、論理的・抽象的思考力を段階的に高める時期を考慮し、発達段階の至適時に応じたカリキュラムを編成することが大切である。

前述したような子どもの脳の発達段階や中１ギャップの課題に対応するために、論理的・抽象的思考力を高める「書く活動」に着目し、学習の仕方や方法を工夫していく。

【本研究で意識する教育区分】

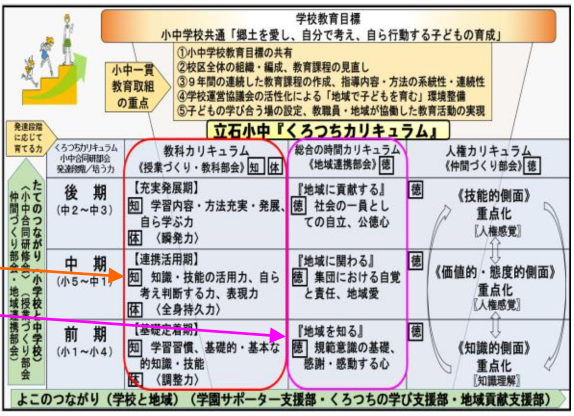
教育区分	前期：基礎定着期				中期：連携活用期			後期：充実発展期	
学校区分	小学校						中学校		
学年区分	１年	２年	３年	４年	５年	６年	中１年	中２年	中３年
学習指導	学級担任制						教科担任制		

② 小中一貫教育とは

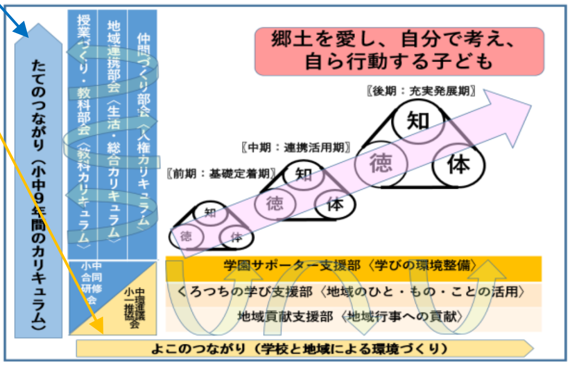
小学校と中学校の義務教育小中９年間を通じて継続的に一貫性のある小中の教育を推進しようとするものである。具体的には次のような取組を行う。

○　小中９年間を見通した学校教育目標（めざす生徒像）を小中学校間や地域で共有し、目標の達成をめざす。
○　小中一貫教育推進委員会を中心に、中学校区で統一した「めざす児童・生徒像」実現のために校区全体の組織・編成、教育課程の見直しを進める。
○　一貫した取組行うために、小中９年間の連続した教育課程『くろつちカリキュラム』を作成し、指導内容や指導方法の系統性・連続性を重視する。
○　小中合同の学校運営協議会（R6 年度より学園運営協議会）を活性化させ、学校・地域・家庭が協働し「地域で子どもを育む」環境を整える。
○　子どもたちが互いに学び合う場を設定したり、小中の教職員が協力して学ぶ場・地域との関わりを深める場を設定したりして、教育効果を高める活動を工夫する。

本校区では、以下に示す立石小中『くろつちカリキュラム』を展開することにより、研究主題に示す望ましい成長を促したいと考える。本校では、その中でもとくに主題設定にある「書くこと」の重要性や「中１ギャップ解消」に視点をあて研究を進める。



《立石小中『くろつちカリキュラム』》



《『くろつちカリキュラム』運営組織》

発達段階の特徴を考慮し、小中９年間を見通した知・徳・体の健全育成のために【教科カリキュラム】【生活科・総合的な時間のカリキュラム】【人権カリキュラム】の３つで構成する『くろつちカリキュラム』を作成・展開する。本研究と関連するのは、【教科カリキュラム】 と【生活科・総合的な時間のカリキュラム】での取組である。

この『くろつちカリキュラム』を具体的に推進するにあたり、小中９年間を見通した学校教育を具体的に進めるたて糸として教職員の研修会を軸につくりあげる小中９年間の一貫カリキュラム。よこ糸として学習環境を整えるための地域の代表者・保護者・学校代表者・教育委員会による協働的な取組を考えている。このような教科部会、地域連携部会、仲間づくり部会による授業づくりの縦糸と学園サポーター支援部、くろつちの学び支援部、地域貢献支援部の横糸を織りなして、立石独自の魅力ある学びの布を作っていく。このようなたて糸・よこ糸にあたるそれぞれの部会を連動して、子どもの知・徳・体をバランス良く培い、学校教育目標である「郷土を愛し、自分で考え、自ら行動する子ども」を育てていく。

【たてのつながり（小中合同研修会）】

授業づくり・教科部会	授業研究会計画及び教科カリキュラム検討
地域連携部会	地域行事参加・参画計画及び生活科・総合的な学習カリキュラム検討
仲間づくり部会	人権・同和教育学習会，授業研究会計画及び人権カリキュラム検討

【よこのつながり（小中一貫教育推進委員会）】

学園サポーター支援部	学校の学習環境整備・充実のための活動
くろつちの学び支援部	地域のひと・もの・ことを活かした地域と協働した活動
地域貢献支援部	生徒の地域行事参加・参画のための支援活動

（２）副主題の意味

①　「書く活動」とは

小中共通の学習課題である「書く力」を向上させるための取組の一環であり、小中合同研修会「授業づくり部会・教科部会」により【教科カリキュラム】の検討を行う。

（※小中９年間を見通した具体的な【教科カリキュラム】は現在検討中）

◎「書く活動」を通して、論理的・抽象的な思考力を高めた《目指す生徒の姿①》

ア　前期：基礎定着期　小１～小４　「書く活動Ⅰ」

基礎的・基本的な知識及び技能を培い、それをもとに《学びの見通しを持つ》「見通す・結果を予想する」

「何が問われているか」や「どんな条件に合わせるのか」といった、「問い」を追求していく上での考え方を選択し、内容を書き表すことができる生徒。

イ　中期：連携活用期　小５～中１　「書く活動Ⅱ」

身に付けた知識及び技能を活用し《学びの考え方をつくる》「比較する」「理由付ける・原因や根拠を見付ける」

根拠（事実）と主張（考えや意見）、理由（考えと根拠のつなぎ）。事象Ⅰ（事実）と事象Ⅱ（事実）、比較・分析（事実と事実の関係性）の３つの要素を意識して、書き表すことができる生徒。

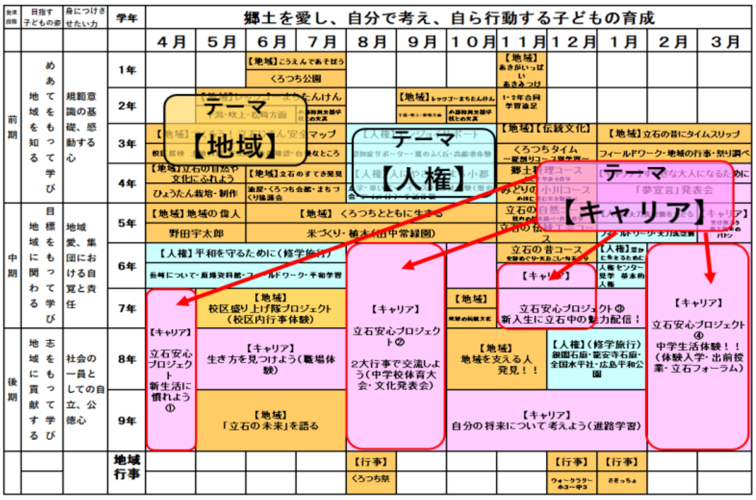
※〈連携活用期〉の内容は本研究のメインとなる活動である。「考えるための技法」である、思考内容『考え方＝方法』の視点から、他にも事象を「順序づけ、分類、関連づけ、具体化、構造化」するなども考えられる。

ウ　後期：充実発展期　中２～中３　「書く活動Ⅲ」

これまで学んだ学習内容や方法を充実させ《学びの考えを振り返る》「多面的・多角的に見る」「何を」学んだかを確かにしたり、「どのように」学んだかをまとめたり、「新たな学習でも使えるか」を書き表すことができる生徒。

中１ギャップに対応するための取組の一環である。小中合同研修会「地域連携部会」により【生活科・総合的な時間のカリキュラム】の検討を行う。このカリキュラムは、《地域》《人権》《キャリア》の３テーマで構成している。「立石安心プロジェクト」は、《キャリア》に含まれ、年間に４つのプロジェクトを計画している。

◎目標を持って地域に関わり、集団における（中１ギャップを解消するための）自覚と責任が身につた生徒《目指す生徒の姿②》



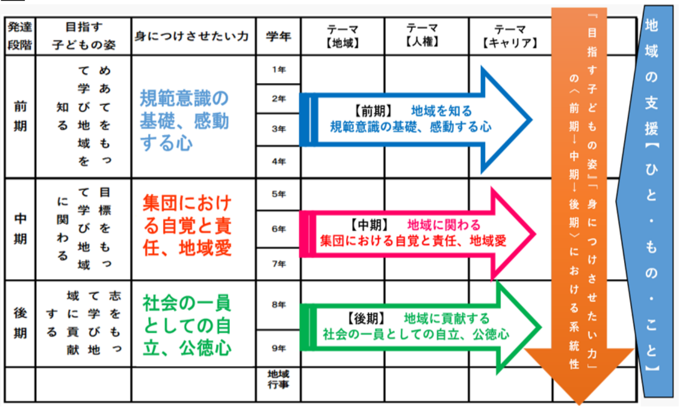
発達段階	目指す生徒の姿	身に付けさせたい力
前期　小１～小４	めあてをもって学び地域を知る	規範意識の基礎、感動する心
中期　小５～中１	目標を持って学び地域に関わる	地域愛、集団における(中1ギャップを解消するための)自覚と責任
後期　中２～中３	志をもって学び地域に貢献する	社会の一員としての自立、公徳心

①新生活になれよう！（4 月）
②2 大行事で交流しよう！（9・10 月）
〈体育大会・文化発表会〉
③新入生に立石中の魅力配信！
（11 月~12 月）
④中学生活体験！（2 月~3 月）
〈体験入学・出前授業・立石フォーラム〉

《生活科・総合的な時間のカリキュラム》

１年から４年を前期、５年から７年を中期、８・９年を後期と考え､前期のめざす子どもの姿を「めあてをもって学び、地域を知る」、身につけたい力を、「規範意識の基礎と感動する心」。中期のめざす子どもの姿を「目標をもって学び、地域に関わる」、身につけたい力を、「集団における自覚と責任、地域愛」。後期のめざす子どもの姿を「志をもって学び、地域に貢献する」、身につけたい力を、「社会の一員としての自立と公徳心」と設定しています。このような目指す生徒像・身につけたい力を小中で共通理解し、授業づくり・学習展開に反映していく。

㊟【生活科・総合的な学習の時間カリキュラム】作成のイメージ



３　研究の目標

生徒の望ましい成長を促すために、発達段階を考慮した①「書く活動」②「立石安心プロジェクト」の取組を通して、①「段階的に論理的・抽象的な思考力を高める」②「中１ギャップを解消する」ための教育課程を究明する。

４　研究の仮説

『くろつちカリキュラム』の以下の２点について工夫を加えれば、発達段階に応じた望ましい成長を促す小中一貫教育が展開できるであろう。

①段階的に論理的・抽象的な思考力を高めることができる、「書く活動」の工夫
　【教科カリキュラム】

②中１ギャップを解消するための小中学校間の交流活動「立石安心プロジェクト」の工夫
　【生活科・総合的な時間のカリキュラム】

５　研究構想

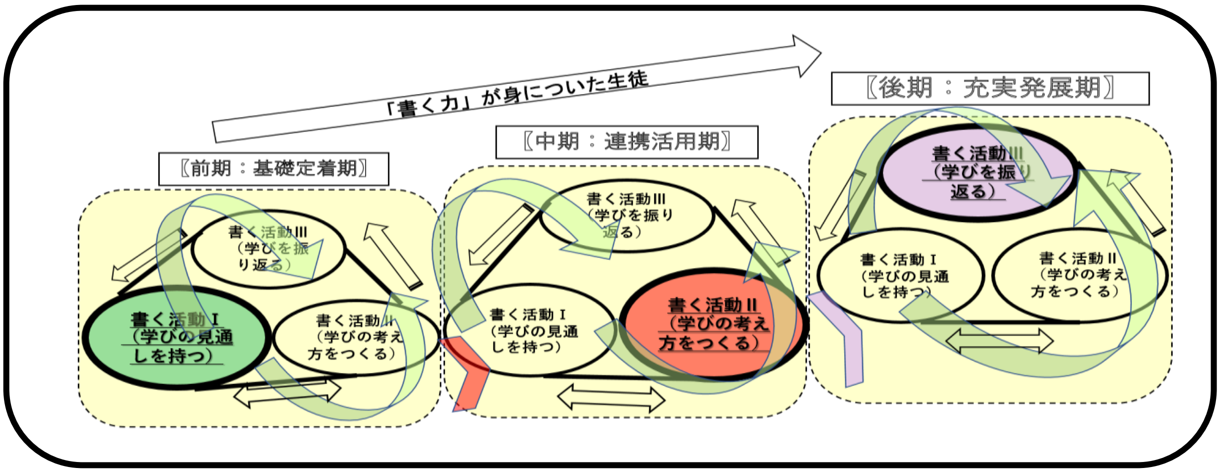
本研究では、①段階的に論理的・抽象的な思考力を高め、②小６・中１のつながりをスムーズにする、「書く力」を向上させることについて、以下のような工夫を取り入れることで、発達段階を考慮した学びのスタイルを確立していく。

（１）発達段階を考慮した「書く活動」

国語科の学習指導要領には〔思考力，判断力，表現力〕の構成要素として、Ａ話すこと・聞くこと、Ｂ書くこと、Ｃ読むことが示されている。本研究では、「書く活動」を通して考えが整理され、伝えたいことが明確になると考えている。前述したように「書くこと」は、論理的思考力の育成の中心であり、「書くこと」は、思考力，判断力，表現力の育成において特に重視すべき言語活動である。「何を書くか」「どのように書くか」を身に付けさせるために、「書

学校区分	小学校		中学校
教育区分	前期：基礎定着期	中期：連携活用期	後期：充実発展期
学年区分	１年　２年　３年　４年	５年　６年　中１年	中２年　中３年
学習指導の目標	【知識及び技能】 学習習慣（学び方の習得）を定着させるとともに、基礎的・基本的な知識及び技能の確実な習得を図る。 ※読み･書き･計算の繰り返し学習を重視し、主として知識及び技能を培う。	【思考力・判断力・表現力等】 小中教職員の密接な連携により､培った知識及び技能を活用し､自ら考え判断し、表現する力を養う。 ※「見方＝視点、考え方＝方法」を重視し、主として思考力・判断力・表現力を培う。	【学びに向かう力･人間性等】 これまで学んだ学習内容や学習方法を充実・発展させ、自ら学ぶ力をつける。 ※社会生活と関連づけ、主として主体性・多様性・人間性を培う。
重点化する「書く活動」	書く活動Ⅰ 基礎的・基本的な知識及び技能を培い、それをもとに 《学びの見通しを持つ》	書く活動Ⅱ 身に付けた知識及び技能を活用し 《学びの考え方をつくる》	書く活動Ⅲ これまで学んだ学習内容や方法を充実させ 《学びを振り返る》
思考内容「考え方＝方法」	見通す・結果を予想する　他	理由づけ・比較する　他	多面的・多角的に見る　他
「書く力」が身についた生徒の姿	①問われていることや目的、条件を明確にできる。 ②問いに対する答えや追求の仕方を明確にできる。	①根拠をつなぎ、理由付けし考えを明確にできる。 ②事象と事象を比較・分析することで共通性や相違・変化を明確にできる。	①何をどのように学んだかを振り返ったり、他の場面や他者の考えと比較したりして多面的・多角的に分析することができる。

くこと」を３つの活動で捉え、授業での一般化を図る。<u>「書く力」の育成は、中期（小５～中１）【思考力，判断力，表現力】の育成をメインとするものの、発達段階に応じて（書く活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を系統的・重点的に取り組み、３つの資質・能力を総合的に高めていく。</u>



《発達段階の特性に応じた「書く活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」》

本研究では、『書く活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』を発達段階の特性に応じて重点化（あくまでも重きを置くという意味で、各段階に『書く活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』を限定するものではない）する。各教科の「見方＝視点」にもとづき、「問い」を設定し、「問い」をもとに各段階に系統的に位置づけた思考内容「考え方＝方法」を働かせる。そうすることで【知識及び技能】【思考力・判断力・表現力】【学びに向かう人間性等】を関連づけながら高める。

各教科の「見方＝視点」および思考内容「考え方＝方法」は以下のように捉えている。思考内容「考え方＝方法」については、上述したように前期：基礎的・基本的な知識及び技能を培い、それをもとに学びの見通しを持つ「見通す・結果を予想する」、中期：身に付けた知識及び技能を活用し学びの考え方をつくる「理由付ける・原因や根拠を見付ける」「比較する」（※立石安心プロジェクト「具体化する」）、後期：これまでに学んだ学習内容や方法を充実させ学びを振り返る「多面的・多角的に見る」活動を中心に取り組む。

【各教科の『見方=視点』】

国語	自分の思いや考えを深めるため、 ①対象と言葉、言葉と言葉との関係に着目して捉える。 ②言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉える。
社会	社会的事象を、 ①位置や空間的な広がりに着目して捉える。〈地理的分野〉 ②時期、推移などに着目して捉える。〈歴史的分野〉 ③政治、法、経済などに関わる多様な視点（概念や理論）に着目して捉える。〈公民的分野〉
数学	事象を、 ①数量やそれらの関係などに着目して捉える。 ②図形やそれらの関係などに着目して捉える。
理科	自然の事物・現象を ①質的・量的な関係の科学的な視点で捉える。〈エネルギー・粒子・生命を柱とする領域〉 ②時間的・空間的な関係の科学的な視点で捉える。〈地球を柱とする領域〉
音楽	音楽に関する感性を働かせ、 ①音や音楽を、音楽を形づくっている要素で捉える。 ②音や音楽をその働きの視点で捉える。
美術	感性や想像力を働かせ、 ①対象や事象を造形的な視点で捉える。
技術	①生活や社会における事象を技術との関わりの視点で捉える。
家庭	家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係わる生活事象を、 ①協力・協働の視点で捉える。 ②健康・快適・安全の視点で捉える。 ③生活文化の継承・創造の視点で捉える。 ④持続可能な社会の構築等の視点で捉える。
保体	運動やスポーツを、 ①運動の価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉える。 個人及び社会生活における課題や情報を、 ①健康に関する原則や概念に着目して捉える。 ②安全に関する原則や概念に着目して捉える。
英語	外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、 ①社会や世界との関わりに着目して捉える。 ②他者との関わりに着目して捉える。

【教科共通の『考え方=方法』】と授業での目指す具体的な生徒像

〇むすびつける授業

①「順序づける」
複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。

②「比較する」
複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。

③「分類する」
複数の対象について、ある視点から共通点のあるもの同士を明らかにする。

④「関連づける」
複数の対象が、どのような関係にあるかを見付ける。

⑤「多面的・多角的に見る」
対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。

〇みつける授業

①「理由付ける・原因や根拠を見付ける」
対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。

②「見通す・結果を予想する」
見通しを立てる、物事の結果を予想する。

〇まとめる授業

①「具体化する・個別化する・分類する」
対処に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げ、対象を構成する。下位概念や要素に分けたりする。

②「抽象化する・一般化する・統合する」
対象に関する上位概念や法則を挙げたり、複数の対象を一つにまとめたりする。

「構造化する」
考えを構造的、網構造・層構造などに整理する。

① 書く活動Ⅰ（学びの見通しを持つ）小１～小４

《思考内容「考え方＝方法」→見通す・結果を予想する》

まず、考えを「書く」前に「何が問われているか」や「どんな条件に合わせるのか」といったことを捉えさせる必要がある。次に、「問い」を追求していく上での考え方を選択し書き表す。見通しを持たせることは、生徒のやる気を引き出すことにもつながる。

○前の問題と何が違うのかを確かめる。
○前の問題では、どんなアイデアを生かしたのかを振り返る。

○簡単な場合に置き換えて考えてみる。
○問題を知っている形に変えてみる。

○問題を図やグラフ、表であらわしてみる。
○わかっていることを、共通点に目をつけてまとめてみる。

教室掲示や板書提示で日常化

めあて

学習目的・必要性

「問い」何のための学習か？

学習のゴールまでの見通し

「問い」・何を学ぶのか？・なぜ学ぶのか？・どのようにするのか？

【「書く活動」Ⅰのイメージ】

② 書く活動Ⅱ（学びの考え方をつくる）小５～中１

《思考内容「考え方＝方法」→理由づける・比較する》

○主張（考えや意見）と根拠（事実）、理由（考えと根拠のつなぎ）の３要素を意識させる。

根拠

データ・事実・結果・事象から

だから

主張

自分の考えや意見

理由付け

「問い」・なぜそう思うのか？
主張と根拠を関係付ける理由

○事象と事象、比較・分析（事実と事実の関係性）の３要素を意識させる。

事象Ⅰ

データ・事実・結果

事象Ⅱ

データ・事実・結果

比較・分析

「問い」・どこが同じか？・どのように違うのか？
事象Ⅰと事象Ⅱを比較・分析した共通性や相違点・変化

【「書く活動」Ⅱのイメージ】

③　書く活動Ⅲ（学びを振り返る）中２～中３

《思考内容「考え方＝方法」→多面的・多角的に見る》

「何を」学んだかを確かにしたり、「どのように」学んだかをまとめたり、「新たな学習でも使えるか」を書き表す。

『何を』

〇今日（までに）、学んだことの要点をキーワードにし、自分の言葉でまとめる。

『どのように』

①既習の考え方と新しい考え方等とつないでまとめる。
②今日（までに）学んだことを、次の新しい考え方につなげる

『使えるか』

①「もし、～だったら…」「例えば、～な場合は…」と具体的に考える。
②「もし、～だったら…」「例えば、～な場合は…」と考えた内容を実際にためしてみる。

まとめ

「問い」何を学んだか？
今日（までに）、学んだこと明確にする

振り返り

「問い」どのように学んだか？
①今日、新しく学んだ考え方をまとめる

ためす

「問い」・もし～だったらどうか？
・例えば～の場合は使えるか？
①次の時間に学びたいことにつなげる
②新しい学びにつなげたことをためす

【「書く活動」Ⅲのイメージ】

（２）発達段階を考慮した「立石安心プロジェクト」

《立石安心プロジェクトの具体的展開》

学年	学習活動・内容	指導・支援・手立て	実施時期
７年～ ９年 (中１～ 中３)	**〇「立石安心プロジェクト」①** ・入学式後の保護者とともに学ぶ学習会 ・対面式 ・合同歓迎遠足	・入学式後の学活で、保護者とともに中学校での授業の受け方や家庭学習の仕方について学ぶ機会を設定する。 ・対面式や合同歓迎遠足でのレクリエーション等を通して、親睦を深める。	４月
６年～ ９年 (小６～ 中３)	**〇「立石安心プロジェクト」②** ・体育大会見学 ・文化発表会見学	・中学生との交流を通して、中学校生活について理解を深め、学級や自分自身の課題に気づき、卒業に向けて主体的に自分の生き方を見つめさせる。	８月 ～10 月
６年～ ７年 (小６～ 中１)	**〇「立石安心プロジェクト」③** ・オンライン配信 （立石小・三国小・のぞみ小）	・中学生活について小学６年生と中学１年生の意見交流を通して、新生活への不安を解消させる。	11 月 ～１月
６年～ ９年 (小６～ 中３)	**〇「立石安心プロジェクト」④** ・体験入学 ・出前授業 ・立石フォーラム	・中１ギャップの解消に向け、中学校の生活や人との関わりの在り方について意見を交流し、中学生としての自覚を深める。	２月 ～３月

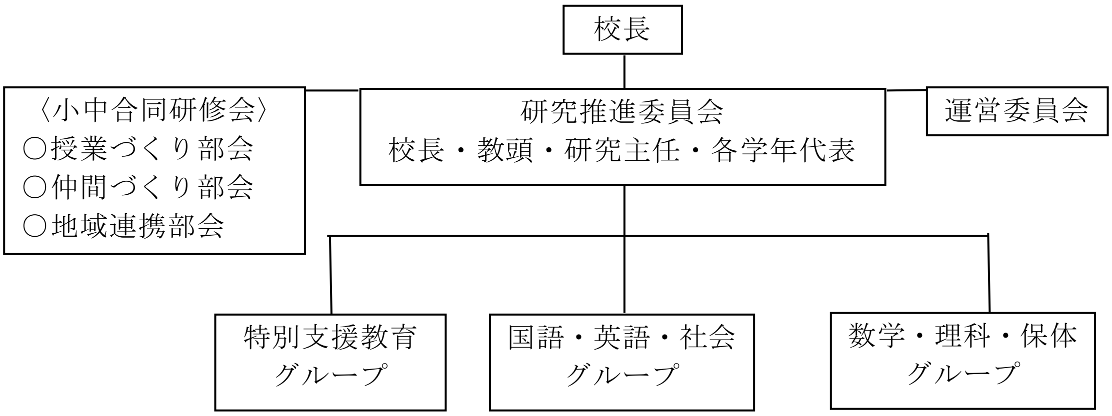
６　研究の進め方

（１）研究推進委員会を設置し、校内研究の推進・活性化を図る。
（２）全国・学力学習状況調査等の結果を検証し、見えてきた課題を全職員で共有し、各教科の実践に活かす。
（３）校内で、それぞれ年１回の研究授業を行う。
（４）年１回以上の研究授業を小中連携して行い、全職員で参加し検証の場とする。
（５）小中連携部会は、授業づくり・仲間づくり・地域連携の３部会とし、年４回実施する。また、運営をスムーズにするために、研究担当レベルでの連絡調整を行う。
（６）講師を招聘しての研修会を行う。また、各種研究会・研修会に積極的に参加する。
（７）学期ごとの ICT 活用（基本的操作、授業での使い方等）に関する研修会を設定する。
（８）日常の取組みを意識化するために、PDCA サイクルを短期化・機能化し、定期的に成果や課題を全職員で交流する。

７　研究推進体制

（１）研究推進委員会は、校長・教頭・研究主任・各学年代表で組織する。
（２）研究推進委員会は、可能な限り週時程の中に位置づけ、研究の運営・推進を図る。
（３）原則として、研究推進委員会を週１回、校内研修会を月１回開催する。

８　研究組織図

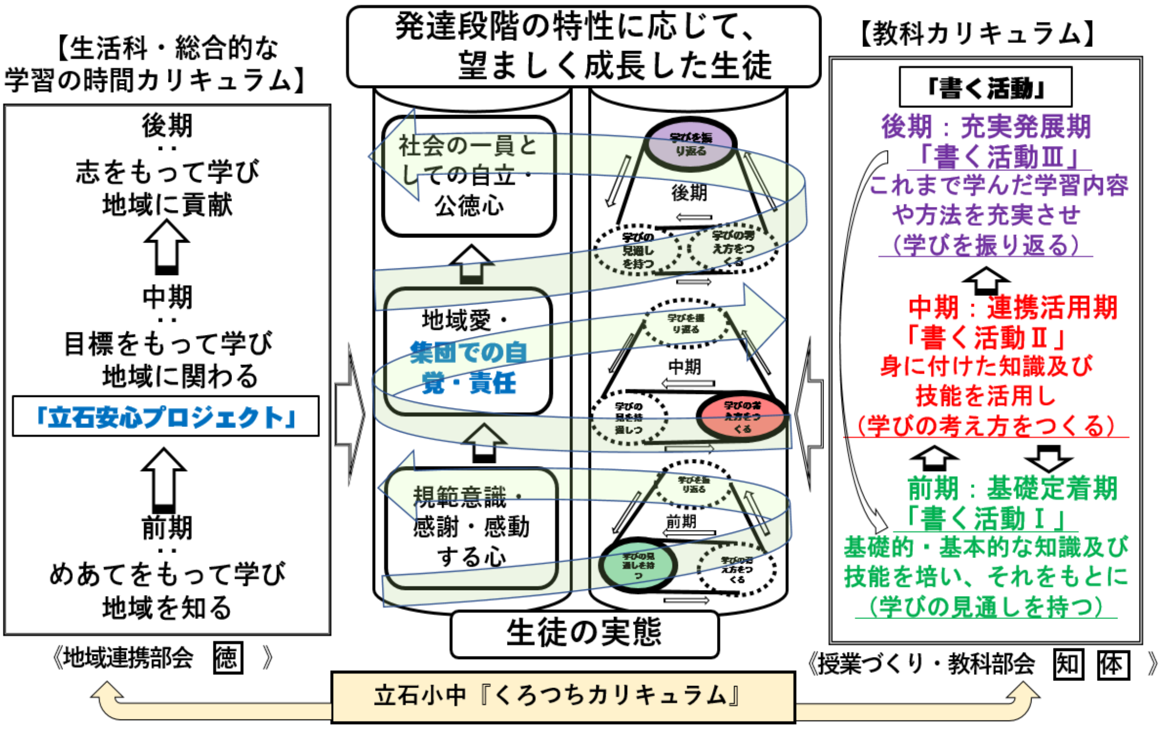


９　年間研究計画

４月	研究推進方針案審議、実態調査分析、研究構想の作成・提案
５月	各教科の目標・学力向上プランの策定、小中合同研修会、学校訪問
６月	提案授業、全体協議
７月	全体協議、授業評価アンケート、授業チェックリスト
８月	小中合同研修会、指導案検討、ICT 研修
９月	全体協議
１０月	授業研究、小中合同研修会（中学校授業研）
１１月	小郡市授業交流会、中教研
１２月	授業評価アンケート、授業チェックリスト、ICT 研修
１月	アンケートの考察、研究実践のまとめ
２月	学力向上プラン実践の総括（教科部会）、小中合同研修会（年間のまとめ）
３月	校内研究のまとめ（次年度に向けて）

※　日常的な小中連携・・・行事や授業参観・研修会交流,

１０　研究構想図



１１　研究の実際

①　理科　単元名「酸化について探ろう」（２年生）

【書く活動Ⅱ】仮説

- 空気中でマグネシウムは酸化した。〔事実〕

↓

- 空気中の酸素と結びついたから。〔理由付け：粒子概念〕

↓

- 二酸化炭素中ではマグネシウムは酸化しない。〔主張・結論〕

【書く活動Ⅱ】考察

- マグネシウムは酸化された。〔事実〕

↓

- CO_2中のＯ原子と結びついたか〔理由付け：粒子概念〕

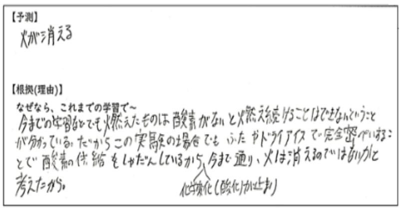
↓

- 酸化は、物質が酸素原子と結びつく化学変化である。〔主張・結論〕

【書く活動Ⅲ】学びの振り返り

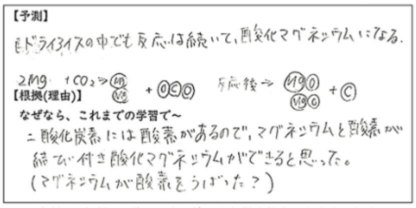
※仮説と考察を比較
※仮説時の不十分な点に気づく
※自分の考えの変容に気づく

- 二酸化炭素の酸素原子に気づく必要があった。
- 空気中の酸素がないと酸化は起きないと考えていたが、他の物質の酸素原子と結びついて酸化が起きるということがわかった。


【予測】
火が消える

【根拠(理由)】
なぜなら、これまでの学習で～
今までの学習などでも燃えたものは酸素がないと燃え続けることはできないということが分かっている。だからこの実験の場合でも ふた やドライアイス で完全密ぺいすることで 酸素の供給 をしゃだんしているから、今まで通り、火は消えるのではないかと考えたから。
化学変化（酸化）が止まり

資料１ 仮説１　酸化反応は止まると仮説を設定した生徒の記述

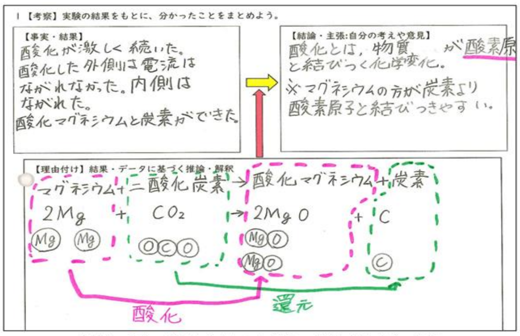

【予測】
ドライアイスの中でも反応は続いて、酸化マグネシウムになる。

2Mg + CO_2 → Mg Mg + OCO　反応後 → MgO MgO + C

【根拠(理由)】
なぜなら、これまでの学習で～
二酸化炭素には酸素があるので、マグネシウムと酸素が結び付き酸化マグネシウムができると思った。
（マグネシウムが酸素をうばった？）

資料２　仮説２　酸化反応は続くと仮説を設定した生徒の記述

写真１　タブレットを使って原子モデルの操作を行っている様子


１【考察】実験の結果をもとに、分かったことをまとめよう。

【事実・結果】
酸化が激しく続いた。
酸化した外側は電流はながれなかった。内側はながれた。
酸化マグネシウムと炭素ができた。

【結論・主張:自分の考えや意見】
酸化とは，物質が酸素原子と結びつく化学変化。
※マグネシウムの方が炭素より酸素原子と結びつきやすい。

【理由付け】結果・データに基づく推論・解釈
マグネシウム＋二酸化炭素→酸化マグネシウム＋炭素
2Mg ＋ CO_2 → 2MgO ＋ C
酸化
還元

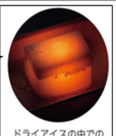
資料３　事実・結果をもとにした結論・主張と理由付けの記述

８　書く活動についての説明

(1)書く活動Ⅱ〔理由付け・抽象化(一般化する、統合する)〕

①【既習の科学的知識】
酸化とは、空気中の酸素(酸素分子)と結びつく化学変化である。→　酸素がない ＝ 酸化は起きない

実験事象



ドライアイスの中でのマグネシウムの燃焼

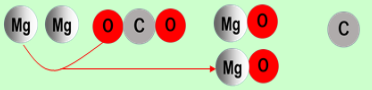
【問い】既習の酸化の考え方では、実験事象の説明ができません。酸化をどのように定義し直すといいと思いますか？

捉え直した酸化の考え

②【事実】※実験結果
- マグネシウムは、二酸化炭素中で、酸化された。
- 酸化マグネシウムと炭(炭素)ができた。

④【主張】※新たな科学的知識
酸化とは酸素原子と結びつく化学変化である。→　酸素原子があれば酸化が起きる可能性がある〔目指す子どもの姿〕

③【理由付け】見方･考え方
マグネシウム　＋　二酸化炭素　→　酸化マグネシウム　＋　炭素



$$2Mg + CO_2 \rightarrow 2MgO + C$$

二酸化炭素中の酸素原子とマグネシウム原子が結びつき、酸化が起きた。
※酸素分子 OO が存在しなくても、酸化が起きる。

(2)書く活動Ⅲ〔自分の考えの変容を自覚する〕

仮説に使った考え方の不十分な点や自分の考えの変容をまとめる。

酸素(酸素分子)がないから、酸化は起きないと考えていた。酸素分子ではなく、酸素原子があれば酸化が起きる可能性があるということに気づく必要があった。

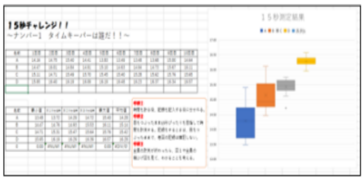
その他〔気づいたこと等〕
- 炭素原子より、マグネシウム原子の方が酸素原子と結びつきやすい。
- マグネシウムは酸化され、二酸化炭素は還元された。

②　数学　単元名「箱ひげ図」（２年生）

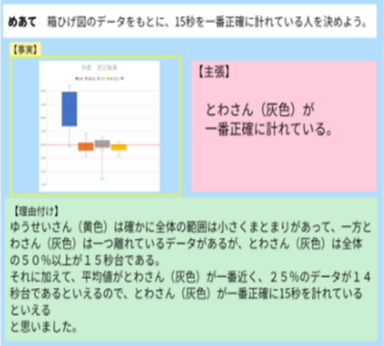
主眼　箱ひげ図を比較することで、誰の体内時計が一番正確といえるか判断し、根拠を明らかにして説明することができる。

(1)書く活動Ⅱ（1時間目）

① 【既習の知識】
・箱ひげ図
・四分位数　・四分位範囲　・中央値
・最大値　・最小値

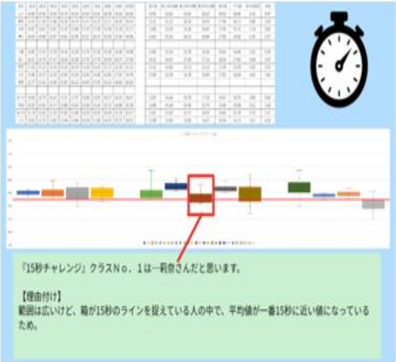


【問い】
15 秒を正確に計れているのは誰だろうか？



(2)書く活動Ⅲ〔学んだ内容・自分の考えの変容・学びの発展、転移性〕（2時間目）

学級のナンバー１は誰だろう？



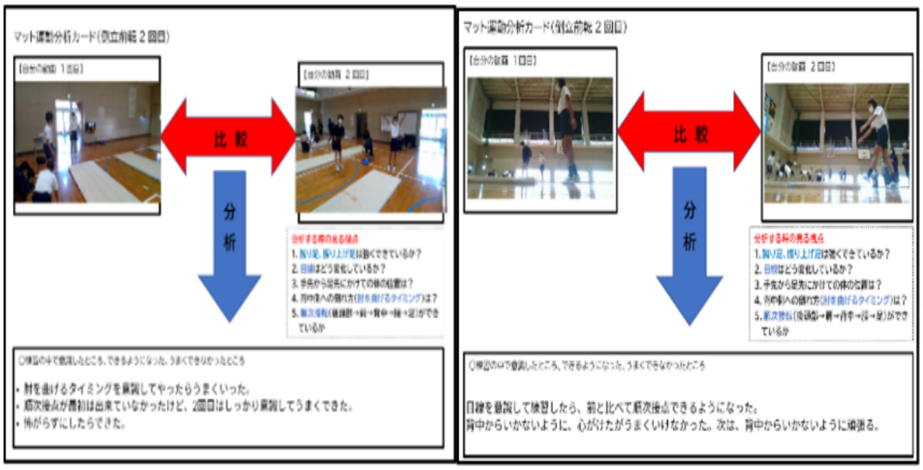
『箱ひげ図　15秒チャレンジ』の学習を終えて（わかったこと・気づいたこと・今後に生かしたいこと）
- 箱ひげ図では、だいたいの数字は読めるけど、正確な数字は読み取れないから正確に知りたいときは他にも資料を見て読み取ったりしたほうがわかりやすい。
- 気温や通信するものを買うときなどに箱ひげ図を使ったりして安定した速い通信などを選べるように生かしていきたいと思う

【資料１】生徒の振り返り記述①

『箱ひげ図　15秒チャレンジ』の学習を終えて
（わかったこと・気づいたこと・今後に生かしたいこと）
- 箱ひげ図は、簡単にデータを読み取ることはできるけど、どちらが大きいかや平均値、最頻値は読み取ることが出来ないということがわかった。
- 15秒チャレンジ…15秒から箱は遠いが範囲に15秒が入っているものと、15秒に箱とひげは近いが範囲には15秒が入っていないものでどちらが15秒を正確に計ることができているかは比べることが難しいということを、この15秒チャレンジで気づけた！

【資料２】生徒の振り返り記述②

③　保険体育　単元名「マット運動」（１年生）



資料３：分析シートによる振り返り

資料 2：撮影した動画を振り返る様子

○練習の中で意識したところ、できるようになった、うまくできなかったところ
- 蹴り足と振り上げ足を意識してしました。
- 肘を曲げるタイミングを意識してすると、うまく回れるようになった。
- 倒立している時間が長くなった。
- 足をそろえることができていなかった。

資料４：書く活動Ⅱの内容

④　社会　単元名「株式会社の仕組み」（３年生）

①【既習の知識】
- 株式会社は株式を発行して資金を確保している。
- 株を買った株主は配当金や株主優待を受けたり（インカムゲイン）、株の値上がりで利益を得たりできる。（キャピタルゲイン）
- 株式会社が倒産したら、投資家は投資金額のみ負担する。（有限責任）

②【既習の知識】（本時の学習：展開）
- 株価は業績や社会情勢の影響を受ける。

【問い】
・2019 年 12 月～2020 年 4 月までの株価はどのように変動しただろうか。

②、③、④は順不同

事実・データに基づく推論・解釈、自分の知識や生活経験

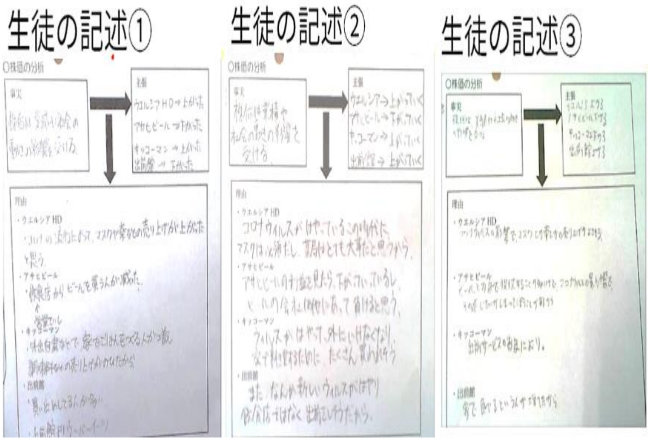
②【事実】
- 株価はその企業の業績や社会の現状、情勢の影響を受ける。

④【主張】
- Ｊストリームとウエルシア HD の株価は上がり、キッコーマンとアサヒビールの株価は下がった。

③【理由付け】見方・考え方

上がった企業
- Ｊストリームは動画配信サービスを行う企業なので、コロナ禍で外にでられない分、需要が高まり、期待する人が増えた。
- ウエルシア HD もマスクなどを必要とする人達がドラッグストアに殺到し、売り上げが伸びたので株価も上がる。

下がった企業
- コロナ禍で、緊急事態宣言や時短営業などで倒産する飲食店が増え、売り上げも減ったので、株価は下がった。
- キッコーマンは、業績は上がったが、飲食店に関する規制や倒産などの不安から株価を手放す人が増え、株価は下がった。



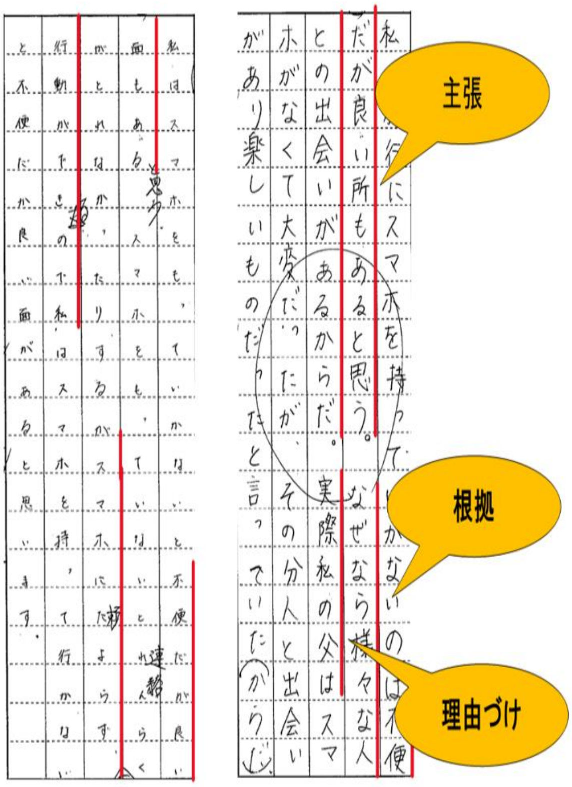
⑤　１　単元名『「不便」の価値を見つめ直す』（1 年生）

①〈事実〉
Ａ インターネットはあると「便利」
Ｂ インターネットがないと「不便」

③〈個人の主張〉
Ａ あると便利だが、犯罪に巻き込まれたり、依存症になったりする危険性がある。
Ｂ ないと不便だが、本で調べたり、取材したりと、自分で考える力が身につく。

②〈理由付け〉
Ａ インターネットを通じた犯罪が近年増加しており、小中学生も巻き込まれるケースが増えている。また、ネット依存に陥り、常にスマホやパソコンを通じて誰かと繋がっていないと不安に感じる人も増えている。（調べ学習）
確かに、インターネットが使えない生活は想像もできない（経験）

Ｂ インターネットが使えない状況でも、必要な情報を伝え合う手段はあり、東日本大震災のときのように、人と人との絆を深めることもある。また、その情報の信頼度も高い。（調べ学習）
小学校のときはそんなにインターネットを使っていなかった（経験）



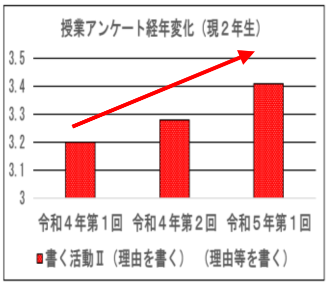
１２　研究のまとめ

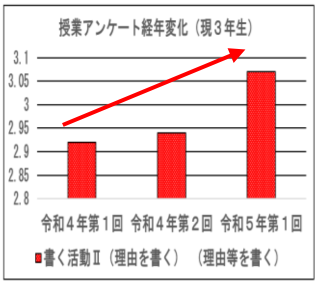
（１）学びから考えをつくり（中期）、振り返ることができる（後期）〈書く活動〉

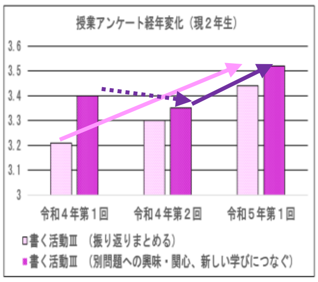
〈書く活動Ⅱ〉学びの考え方をつくる。（①根拠をつなぐ、理由付け②比較・分析）

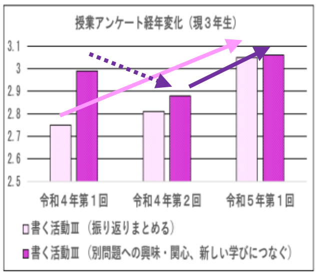
〈書く活動Ⅲ〉学びを振り返る。（①振り返りまとめる②別問題への興味・関心、新しい学びにつなぐ）。

【授業アンケート】より





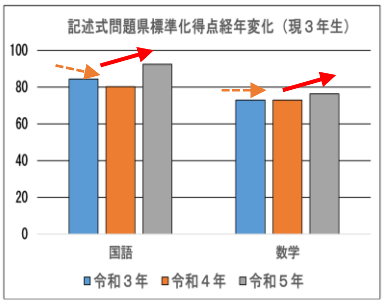




〈書く活動Ⅱ〉
○「理由を書く、比較・分析する」については、令和４年（１・２学期末実施）から令和５年（１学期末実施）にかけて現２年生（2.92→2.94→3.07）３年生（3.20→3.28→3.41）ともポイントが伸びている。

〈書く活動Ⅲ〉
○「振り返りまとめる」については、令和４年から令和５年にかけて現２年生（3.21→3.30→3.44）３年生（2.75→2.81→3.05）ともポイントが伸びている。
○「別問題への興味・関心、新しい学びにつなぐ」については、令和４年の１学期末から２学期末にかけて現２年生（3.40→3.35）３年生（2.99→2.88）ともポイントが下がっている。研究の取組当初は、「振り返りまとめる」を中心に取り組んだためだと思われる。しかし、令和５年の１学期末かけては、現２年生（3.35→3.52）３年生（2.99→3.06）とも大きく伸びている。

【全国・福岡県学力調査】より



〈記述式問題標準化得点経年変化〉
○現３年生の３年間の変化をみてみた。令和３年から令和４年にかけて国語（84.3→80.2）数学（72.8→72.8）とも伸び悩んでいる。令和３年は、まだ「書く活動」に視点をあてた研究に取り組んでいない。令和４年から、「書く活動」を授業研の中心に据え取組を進めた。令和５年にかけては国語（80.2→92.3）数学（72.8→76.3）と伸びをみせている。

（２）「立石安心プロジェクト」による小中学校間の交流活動

○「立石安心プロジェクト」②

【体育大会見学】

【文化発表会見学】

○「立石安心プロジェクト」③

【意見交流会（オンライン）】

○自分達で振り付けを考えていると聞いて驚いた。小学校のソーラン節にも自分達のオリジナルの動きを加えていきたい。
○ダンスがキレッキレですごかった。「あんな風に踊りたい」という目標で持てた。
○合唱の歌声がとてもきれいだった。生徒全員で取り組んでいるのがすごいと思った。
○合唱をきいて、小学校とはレベルがちがうと思った。

○疑問に思っていたことに答えてくれて、安心感がわいた。
○動画が面白くて、楽しく見ることができた。

○「立石安心プロジェクト」④

【中学校生活説明】　【授業体験】　【部活動体験】

○分かりやすい説明で、中学校生活のイメージがふくらんだ。
○授業を一緒に受けてみて緊張したけど、みんな優しくて安心した。
○中学校の授業の様子が分かって良かった。小学校とのちがいに気付くことができた。
○実際に部活動を体験できて、早くやりたいという気持ちになった。
○部活動で頑張っている先輩の姿を見て、とてもたくましく感じた。

9　成果と課題

○　小学校・中学校の共通課題である「書く活動」に着目して授業研究に取り組むことで、小中９年間の発達段階を考慮した教育課程の重要性について共通理解することができた。

○　小中合同研修会における「授業づくり部会」の取組を「教科部会」に発展させることができた。このことにより、校種の垣根を越えた小中９年間を見通した教科カリキュラムを検討することができた。

○　「立石安心プロジェクト」【意見交流会（オンライン）】の取組を、特認校制度の対象である小学校にも広げることができ、中１キャップ解消の一助とすることができた。

●　**児童・生徒や地域の実態に応じた『くろつちカリキュラム』**【教科カリキュラム】【生活科・総合的な時間のカリキュラム】【人権カリキュラム】のさらなる検討と充実を図る必要がある。

●　小中一貫教育を円滑に推進するために、推進委員会および学校運営組織の見直しを進める必要がある。

《参考文献》

・早稲田大学　教育学部教授　安彦忠彦
「カリキュラム開発で進める学校改革 - 21 世紀型授業づくり」
・広島大学大学院教育学研究科　井上弥　「児童・青年期発達論」
・「『書くこと』を重視した授業づくり」の配布資料　北筑後教育事務所　令和元年１１月
・令和元・２年度　小郡市教育委員会研究指定・委嘱校　研究発表会　宝城中学校研究紀要

立石小学校

立石中学校

立石小中学校教育目標

「郷土を愛し、自分で考え、

自ら行動する子どもの育成」